

幾といのちの限り

戦争と平和を生きた夫婦愛

黒岩健一

愛といのちの限り——戦争と平和——を生きた夫婦愛

四百二十円

昭和四十年五月五日 発行

黒岩健一△著者▽

大島重次△発行者▽

番町書房△発行所▽

東京都港区赤坂青山北町四の五一 外苑会館 振替・東京一五八四四 電話(四三)三四一一

太陽印刷工業株式会社△印刷所▽

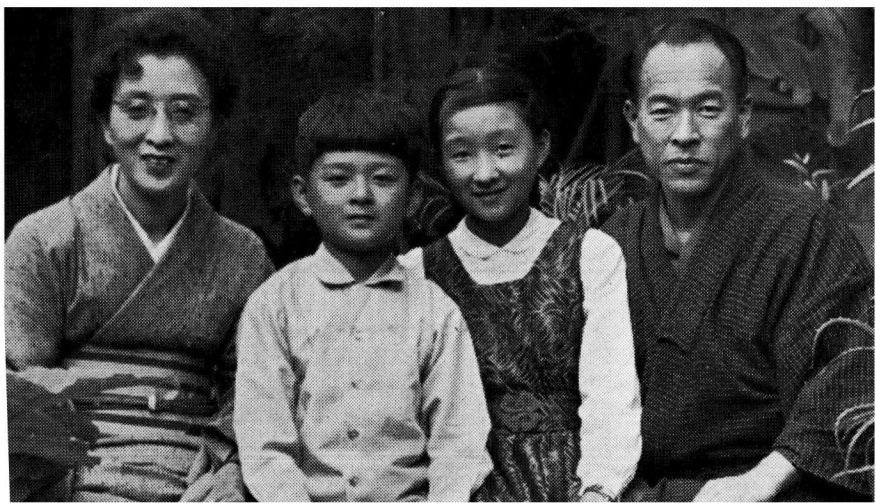
株式会社昇栄社△製本▽

△著者紹介▽大正二年、高知県生まれ。検定で郷里の小学校教員となり、吉井勇に師事した。上京して東洋大学国文科を卒業、東京市立三中(現都立文京高校)教諭となる。応召し外地から帰還後、ひきつづき同校に在職中。著書に「古典入門」「文学史の流れ」その他がある。住所・東京都荒川区町屋町六の三八

愛といのちの限り

『戦争と平和』を生きた夫婦愛

黒岩健一



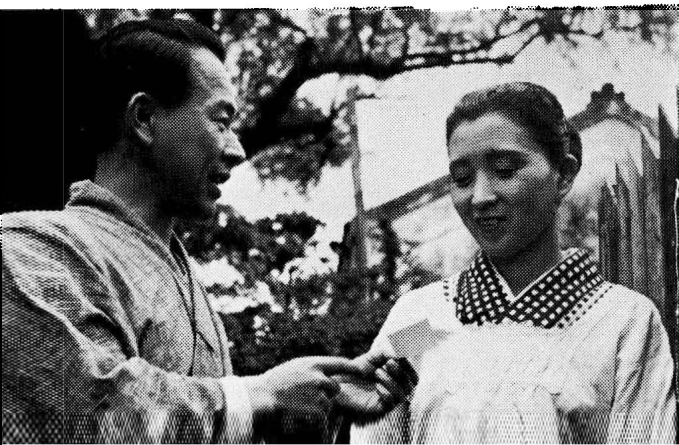
ありし日の嬬子夫人と共に



「その枝のおれた時 自分の
手足に 痛みを感じる」 理瑛



あどけない瞳に優しい母の
像があざやかに映っていた。



ふたりが微笑みあう日も、
もう遠く去ってしまった。

人間の最も大きな単位は夫婦である

健

一

愛といのちの限り

第一部

七年目に来る者へ	10
信じがたき縁	27
夜の愚かさ	56
とこしえの誓い	64
甲斐なき化粧	75
——妻の手記より	75
妻の四季	91
戦火をくぐりて	120
エンジェラスの鐘	138
地下室のなか	149
懐妊への願い	159

第二部

かぐやひめ	174
齒車の狂った年	184
姓名うらない	193
南風日和	202
長寿枕	213
寝顔	222
運のつき	226
青春の地	233
へそくり競争	242
三つの名前のある犬	255
今朝の秋	268
愛といのちの限り	275
あとがき	286

妻は

とつぜん遠い世界へ
行ってしまった。

いま、

夫婦の仲の

どんなことを書こうと、

妻は

何んにも言わない。

何んにも言えないのだから、

かつて

妻が読んで承知していた記録を

書き返したり、

これから書く

夫婦の事実を

脚色したりしてはなるまい。

第一部

七年目に来る者へ

青い繊細な縞目^{しまめ}が空の隅ずみまで、いっぱいキラキラと輝いて見えるような、一月とは思えない、静穏な、暖かい、晴れ上った日である。この日、あんたは生まれるのだ。

どんな子どもなのか、誰も知らないことだ。男か女か、それもわからない。名前の付けようもないので、あんたと言うほかはない。七年間も待ちに待ったあんたが今日はやって来るのだ。パパは朝から「あんたへの日記」を書いている。

「ほんとうに可愛らしくパパ、ママと呼ばせましょうよ。」

あんたのお母さんはそう言ってきたので、これから私達二人のことはパパ、ママと書くことにしよう。

パパがこれを書いている間、リヤカーに蒲団袋^{ふとん}、柳行李^{りゅうり}、そのほかお産用品を積んで、ママは産院へ行くのを待っている。さいわい家から十五分ばかりの所に、産院が戦災から焼け残っていた。そこへずっと前まえから予約しておいたのだが、いよいよとなるまで入

院は許可されなかった。今朝、陣痛があったので、パパはあわてて産院へ走った。「しゃあ、午後ベソドが空きますから、どうぞ」と言われて引き返して来た。

そわそわした気持ちをしずめるためにも、パパは昔のことから書いてみよう。

パパは四国の田舎で高等小学校を卒業する春、校庭の芝生で友達と結婚の話をし合った。みんなは数え年十七であった。膝を抱いた者、寝そべった者、ふんわりとまだ黄色く枯れたままの芝生が居心地のよい敷物になって、誰もが結婚ということに好奇心を寄せ合っていた。

「おれは徴兵検査がすんでも三十までは結婚などしないぞ。」

そう言う友達の一人がその場の特異な、いちばん誇らわしい存在におかれた。二十歳の徴兵検査がすんだら結婚するというのが、村の一つの慣例であった。

「君は卒業したらすぐ結婚するがよい。それが何よりの孝行しゃからのう。」

パパはそんな同情半分、冷やかし半分の対象にされた。でも小さい時から両親のなかったパパは、前まえから「十八になったら嫁をもらう」と、おじいさん、おばあさんが言ってきた通り、早く結婚しなければいけないとその氣でいた。

学校が終った。家の田圃では三人が働くようになった。

「十八になったら結構世帯は持てますがな。ほれ、あの桂月しいさんを見るがよい。十六じゃった。嫁は十四、夫婦でダンスや長持の上から飛び下りっこをして遊んでいたというのに、すぐ子ともも生まれたし、財産もふやしたし——」

向かうの田圃で同じように麦踏みをしている近所の小父おじさんが、大声でこちらへそんな話をした。ちょうど郷里の家から筋向かいに小谷一つ隔てて、黒松が白壁の倉の上に枝を張った屋敷がある。奇知にも富み、奇行も多く、容貌ようはうや声まで、これほど大町桂月そっくりの者はないと言つて、桂月しいさんと呼んでいるその楽隠居のことだった。

何時も手紙の代筆を頼みに来る近所の小母おはさんはこんなことを言つた。

「婿むこが若いので、それにつれ合つた年下の娘は、まだ惜しがって呉れる家がないなら、年上がよい。ことに一つ年上は買うてでも持てとさえ言う。まあ、あの三楽の夫婦がほんとうにそうよ。おやじさんの代だにはさほどでもなかったのに、いまの夫婦になつてからは、えらいもんじゃないか、あんなに商売繁昌で——」

村に一軒ある造り酒屋、最近ぐつと拡張した敷地に、幾つも仕込み桶おけを並べ、霜の朝もシヤツ一枚のトウジ男が踏台にのぼつて、その大きな桶を洗つていた。三人の娘をみな城下町に下宿させて女学校へやつている「三楽酒屋」のことであつた。

近所の人達がこうした話を出してきた時に、おばあさんは、

「そうよ。この子の嫁もいま何処かで大きくなりよることじやろうが……」と話を合せた。何処かで生長している——パパはおばあさんのこの言葉がとても感慨のこもつたものに聞えた。

十八歳になつた。しかしパパの十八歳は村の小学校へ奉職（代用教員）したことですんでしまつた。そうして、三十までは結婚などしないと云つた友達の婚礼が、ある日学校の

下を通って行った。

晩学で東京に出てようやく大学を出たパパは、卒業記念の写真を貼ろうと、古いアルバムを開いて見ると、昔の友達はみんな結婚していて、あの時、校庭の芝生で話し合った者とは、すっかり立場を代えている自分に気がついた。郷里にはもうおばあさんが一人になっていた。パパはあわてて結婚した。

見合結婚とも、恋愛結婚とも言えない不思議なママとの結びつきは「信じがたき縁」というパパの手記があるから、そのうちあんたもこれを読むだろう

とにかく、そんなわけで取りわけおばあさん（あんたにはひいばあさん）は、あんたをどれほど待っていたか知れない。どんなにあんたの姿を見たかったかわからない。でも、パパは新婚六カ月で戦争に行くし、大変な戦時下を頑張りつづけたおばあさんの八十三歳の長寿も、あんたを見ることは出来なかった。パパが内地帰還で戦地を立つ時におばあさんは死んだ。

終戦後三年も、あんたは二人の仲に來てくれる気配はなかった。その間のママの焦燥や苦心は、これも「懐妊への願い」として書いて置いたものがあるから、大人になったら読んでみるがいい。

ただ一つだけ、ママが東京を離れて、まるきり事情のわからない土佐の山奥で、おばあさんと二人で銃後を守りながら、戦地へよこした手紙の一つを書き写して置こう。

野戦高射砲兵で九州の部隊へ入隊する時、ママは九州までパパを見送った。すぐにも外

地へ立たねばならない入隊の前夜、思いがけなく、緒方家という素封家の芳志を受けて、大麥に立派な部屋に泊めてもらい、最後になるかも知れない夫婦の枕を交わした夜半、

「この子だけを持って帰ってくれ。」
とパパは言った。

「ハイ。きつと……。」

ママはパパへ手をつけて答えた。

きつと恵みの神に願いが通じて、夫婦というもののかたみだけは残ることを、パパもママも信じ合った。

……(略)……ちよつと淋巴腺を腫らし、大した事はないと思いましたが、大切な体ですので、村のお医者さんに診てもらいましたら、レントゲンがないから町の病院へ行くようにと言われました。

それで遠い城下町までバスに乗ったり、汽車に乗りかえたりして参りましたのに、レントゲンはこわれているから注射すると申しました。妊娠していても大丈夫でしようかと聞きますと、大丈夫ですとの事で、注射していただきました。その注射のためでしょうか、貴方に何んとお詫びを言っているやうに、本当に残念な事になってしまいました。

日参しております氏神様から今日帰る途中、わたくしは石段の処につくなんて、声

を挙げて泣いてしまいました。もうないと神かけて祈ってまいりましたわたくしの体のものが、始まってしまいました。誰もいない氏神様の森でしたので、「神様をお恨み致します」と、思いきり声を放って泣きつづけました。

貴方がいよいよ戦地へ立つ事がわかって、わたくしが面会にまた九州まで駆けつけました時も、まっ先に貴方は「今月はまだか？」とお尋ねになりましたわね。「大丈夫だと思います」とわたくしが申し上げましたら、「もしあつても力を落すな」と言っただけで下さったその言葉が耳に残っていて、一層残念でなりませんでした。

こんな御報告を戦地の貴方へすべきではないとも思いましたが、いずれはお知らせしなければならぬ事だし、これも、貴方がきつと武運に恵まれ、無事帰還させてやるとの神様の暗示かとも思い、つらいペンを取りました。どうぞ御無事で必ずお帰りになって下さいませ。その日まで、お祖母様も、家の事もわたくしがしっかりお守りして居ります。……(略)……

御主人様へ

環子

パパはこの手紙を、何処へ移動して行くのか、行先のわからない暫くの集結地、満洲の遼陽で受け取った。

この遼陽はパパのお父さんも、日露戦争後の守備隊として、二年間も駐屯した所であつ